

10月17日(金) 13:00~14:00 第6会場 アイーナ8階 804A

認知症⑭ 【座長】矢尾板 誠一（老人保健施設今市Lケアセンター）

第1群：101 入所

第2群：202 症例・事例による貴重な意見

第3群：D3314 認知症 生活リズムと環境

身体拘束廃止への取り組み

介護老人保健施設 リハビリタウンくじ

久保 亘

施設入所という環境の変化に伴う認知症高齢者の心や行動の変化に寄り添い、様々なアプローチを行った経過について報告する。

【事例紹介】名前：I氏 性別：女性 年齢：83歳 要介護度：5 入所日：H25 9月18日

【入所当初】入所から一週間、「ここは自宅なのになんであんたがここにいるんだ」など混乱している様子があり、車椅子から立ち上がろうとして転倒するという事故が起きた。I氏は自分のいる場所や体の状態をよく理解していない様子で、日によって「体を治して早く家に帰りたい」と話し、落ち込んでいる日もあれば「ここは自宅だ、早くご飯を作らなきゃ」「車を運転して帰りたいから連れてって」と話し興奮するなど訴えや行動がばらばらであった。そのため介助者の負担が増し、対応しきれない時もあった。入所から何日かすると、大声を出す事が多くなり「ちょっと、看護師さん起こしてください」「誰か来てください」と臥床中常に叫ばれる、近くを職員が通ると用もなく呼び止めるなどが多々あった。さらに、離床しているときはブレーキを自分で外し動こうとする、何かにつかまり立ち上がろうとするなど一日中不穏な言動がみられたため安全を確保するという理由で臥床させる時間が多くなり、昼間の離床時間が減っていった。数週間後にはますます症状がひどくなり「薬に毒が入れている」「誰か俺の部屋をのぞいてる」「廊下でおばあさんの死体が放置してある」など幻視、幻覚、妄想などによる訴えや介助拒否などが現れた。

【身体拘束の開始】10月20日、息子夫婦が面会に来られる。居室で過ごされていたが息子が目を離した際にI氏が立ち上がろうとされ、居室内で転倒される。息子より「家族が来ているときでも職員は目を離さないでほしい、ベルトで車椅子から自力で立ち上がれないようにしてほしい。」と要望があり息子夫婦との話し合いの結果、離床時は常にベルト着用となった。

【入所より一ヶ月後】徐々に自分の体の状態を理解してきたのか見当違いの訴えが減ってきたものの、落ち込んだり泣いたりすることが増え始める。また、この頃から弄便やオムツいじりなどの不潔行為が始まり、ベッド上での体動が激しくベッドからの転落の可能性も出始める。また、大声を出すのはかわらず、排尿や排便がなくてもパットを取り替えてほしいと頻繁に叫ぶようになっていた。臥床するとすぐ「起きたい、食堂に行きたい」離床すると「腰が痛い、尻が痛い、横になりたい」と、じっとしている事が無く、早朝から夕方頃まで一日中職員の名前を叫んでいた。そのつど声かけや説明などを行うも理解されていないのかほとんど効果は無かった。安全のために使用していたベルトも何度か自分でははずす事があり、ベルト着用時でも職員は長時間目を離すことができなかった。

【職員達による心のケア】落ち込んだり泣いたりすることが多くなってきていたため、手の空いている職員が傾聴などを行っていたところ、明るい表情が見られた。さらに、自分に良くしてくれた職員の名前を覚え「〇〇さんは良い人だ」など笑顔で他の職員や利用者に紹介する場面が見られた。それからしばらくすると、弄便やオムツいじりなどの回数が少なくなり、落ち着いてきている様子が見られ始めた。傾聴などI氏とのコミュニケーションの時間を増やしていった結果、異常行動・幻覚・妄想などが減少していき、それにより、こちらの話しを理解するようになるなど介助者の介護負担も減っていった。このことからI氏がなぜ騒いでいたのか職員達で考えた結果、不安や焦りからくるものではないのかという結論にいたった。そのため、本人が一日穏やかに過ごしたときには褒める、訴えが多いときには話しを良く聞き、共感や励ますといった方法で本人の不安や焦りを取り除きコミュニケーションや離床の時間を増やしていった。さらに、気分転換に散歩にお誘いしたり、新聞や雑誌などを読んだりと気を紛らわせる事により、不安感や焦りをあまり抱かせないようにした。

【身体拘束の廃止】気持ち落ち着いてくると、自分ひとりで立とうとしなくなり、職員の見守りのもとでリハビリとしての立位をするようになった。また、危険な行動が減った結果、離床時間が増え他利用者との交流の時間を多く取れるようになり、いつも会話をする利用者が食堂にいると臥床の訴えやブレーキははずしが無くなり職員が安心して他利用者の介助にいけるようになった。このことから、ベルトの必要性がなくなり、離床中でもベルトの使用をしなくなったため息子夫婦にもこの事を伝え、ベルトの使用を終了したことを伝えると快く了承して下さった。身体拘束廃止後、転倒やずり落ちなどの事故は起こっておらず現在でも安定した生活が送れている。

【結果】I氏の心のケアを進めていった結果、ほぼ毎日あった問題行動が数週間に数回程度にまで減り、本人も「リハビリをやって体を治して家に帰りたい」など現実的な訴えをするようになった。また、大声を出す事は日によってはあるが、「パットを取り替えてほしい、起きて食堂に行きたい」などのような訴えだけになり無意味な訴えが減ってきている。危険な行動に関しては、まったく無いというわけではないがゼロに近い状況であり、もしそのような兆候が見られた場合に

は職員とのコミュニケーションで気を紛らわせたり、そばに寄り添うなどして事前に防げている。

【まとめ】入所初期の頃は、職員達が対応に戸惑い介助が上手くいかず、かなりの負担になっていた。しかし、安全の確保や介助の効率を重視するのではなく、利用者の心のケアに重点をおき介助を進めていった結果、本人の問題行動が減り介助に協力的になった。結果として安全の確保や効率改善につながっていった。今回の事例は、介護職だけでなく、看護職やケアマネジャー、利用者などユニット全体の協力があってこそ成功した事例である。これからのケアは今回の経験を生かし他職種で連携しあい、密な情報交換をしながら進めていきたいと考えている。